

# 中世における「新古今集」享受と「自讃歌注」研究序説

における「                    」 と 「                    가                    」

## 中世における『新古今集』享受と 『自讃歌注』研究序説

王 淑 英  
(日語日文科)

### A Preview of Study on JISANKACHU an SHINKOKINSHU in the Medieval ERA

Wang, Sook Young  
(Department of Japan Language)

SHINKOKINSHU, the eighth version of wakkashu, an anthology of Japanese poetical Genre of wakka (court poetry), edited by royal order in (1205 A. D.) the early year of medieval period, constitutes one of three main poetical trend together with MANYOSHU and KOKIMSHU.

Its digest version is called Jisanka which is consisted of ten most important poems written by seventeen poets and many of its poems are becoming known with the scholars notes through following period. It is named JISANKACHU.

The commentary response to the Shinkokinshu has experienced gradual changes from negative criticism reaching positive appreciation. The main factor that enables to cause this change is Renga (linked poetry) which covers the major part of Japanese poetry in medieval period since Renga has been devaluated.

Renga has been mainly influenced by the poetic world of Shinkokinshu, and it naturally helps increase readers' interest in Shinkokinshu.

Accordingly it encourages Renga poets to study Shinkokinshu in order to enlarge their poetic world. The material widely used by them is its digest version, Jisanka, instead of Shinkokinshu.

Therefore Jisanka notes can be considered one of the most important materials in studying Shinkokinshu. However, Jisanka notes are not still properly accepted because of poor recognition of its importance.

This paper purports to reexamine Jisanka notes, considering the following:

1. The changes of evaluation Shinkokinshu had made in the medieval era.
2. Brief review of the glossary and the notes of Shinkokinshu in the medieval era.
3. The meaningfulness of Jisanka and Jisankachu.

## 序

春の夜の夢の浮橋とだえして  
峰にわかるる横雲の空

(春歌上 三八番)

周知のように『新古今集』の歌風を代表する歌としてよく掲げられる定家の、春の曙を詠んだ歌である。春の短い、はかない夢の途中からさめた朦朧とした目に、夢の続きのように広がる情景。それは、夜の間峰に低くかかっていた雲が、まるで愛しあっていた男女が早朝、後朝（きぬぎぬ）の別れをするように、今、峰からわかれていく所である。春曙の静かに明け行く山家での寝覺めを戀の世界にもかよわせ、美しく余韻をのこすものとしている。その背景には『枕草子』や『源氏物語』『文撰』等古典文学作品の世界がある事は、これもよく知られている事である。

「夢の浮橋」は『源氏物語』の最終の巻、主人公薫と浮舟の悲戀が浮橋のようにとぎれたまはかなく終わってしまう「夢の浮橋」の巻を想起させ、浮橋のようにはかない夢が戀の夢である事を暗示し、途中でとだえてしまった夢を一層名残おしいものとしている。下の句はそういう妖艶な夢からさめた人の目にうつった実景でもあり、心情のイメージ化でもあろう。「わかるる」という擬人法をつかった表現と、中国の『文撰』の「高唐賦」ならびに「神女賦」の、襄王が夢裡に巫山の神女と契ったという「朝雲暮雨」の故事の俤をうかばせる「横雲の空」は神女の艶やかな舞姿をも連想させ、上の句の世界との調和でさらに歌の世界を広げている。春曙は清少納言が『枕草子』冒頭で「春はあけぼの」とたたえて以来、伝統的なものとなっているのはいうまでもない。

このように、古典作品による物語的世界の展開や複雑な修辞技巧の駆使によって現実からはなれた夢幻の世界、余情妖艶の世界を創出している。そして、これらはこの時代に作り出された新しい手法である。

この定家の歌風に新風が代表される『新古今集』は鎌倉時代初期（元久二年（一二〇五）一旦成立）後鳥羽院が中心になって編纂した第八番目の勅撰和歌集である。和歌史の流れの中においては『万葉集』『古今集』とともに三代歌風をなし、三十一文字の形式としてはほとんど可能なかぎりの技法が発展しつくしたといわれる和歌集である。

新古今集の大部分の歌は、権力の中心が武家に移ろうとする貴族にとってはやるせない、無力であるよりほかなかった時代に、古代への回帰を夢みながら耽美的な情趣生活へ没頭しつづつくりあげられたものである。続く戦乱の中で、末法思想は流行し、無常感はただよい、そういう複雑な心情を表現するには現実をそのまま詠むわけにはいかなかったのであろう。現実からはなれた虚構の世界を象徴的に表現していった。そして、よく比喻としてたとえられるように、花火がはなやかにすぐ散ってしまうごとく、幽玄、妖艶といわれる美の世界は新古今集を頂点にして、その後わずかに継承されてはいくが、おもに和歌の世界では平明、優雅な歌が主流をなし、新古今歌風はやがて、中世詩の中核をなす純正連歌へと受け継がれていくのである。

本論はこのような新古今集が成立後、中世においてどのように享受されていくのか、またその中で自讃歌はどのような意義を持つのかを辿るための序説である。内容は、(一)新古今集の中世における評価、享受の大事な一翼を擔う(二)古注釈の概観、その中での(三)自讃歌及び自讃歌注の意義と三つに分けて考えて行きたい。

なお、この論は、あくまで全体像を把握するための序論にすぎないものであり、(一)、(二)を中心に一般的な傾向にとどめたものである。自讃歌注に関する詳しい各論は、すでに発表された諸氏の研究や拙考、また続いて発表されるであろう、今後の諸論にお譲りしたく、大きな特徴を示すにとどめた。

## 1. 中世における新古今集の評価

鎌倉時代初期成立の『新古今集』にとって中世は、奈良、平安時代成立の『万葉集』『古今集』『源氏物語』等の作品に比べれば、大きな意味で当代にあたる時期かもしれない。しかし、その約四百年間のあいだ、新古今集に対する評価には、少なからぬ変化があったようである。すなわち、初期は否定的傾向であったのが、だんだんと認識が高まって行くにつれて積極的評価へと状況が変わっていったのである。ここでは新古今集成立直後から室町時代末期までの評価の変遷の一般的傾向を、先学の力を借りながら歌論等を通してたどって行きたい。

### (1)

新古今集の後をうけて成立した第九番目の勅撰集は文暦二年（一二三五）成立の『新勅撰集』である。新古今集のような多撰と異り、これは先掲定家の独撰によるものであった。そして、その歌

#### 4 王 淑 英

風は「余情妖艶」といわれる新古今歌風に比べて優雅平談な歌風が主となるものであった。「『新勅撰集』の撰集方針は新古今集を否定して、むしろ古今集に帰ろうとしている様に思われる」<sup>1)</sup>といわれているように晩年(当時七三才)になって、指向する歌の世界の推移があったのであろう。それはほぼ同時期に撰んだ『小倉百人一首』の撰出精神とも通じるものである。

次に同じく新古今歌人の一人であり、代表的な女流歌人でもあった俊成卿女が後年、為家に送った『越部禪尼消息』(一二五一年)で、新古今集に対して

新古今又春の花、秋の紅葉を一つにこきまぜて、鳳池の秋月、梁苑の雪の夜とかや歌ひし心地して、御手づからなる詞遣まで、めづらしくけだかうおもしろく、京極殿のかんな序など、心詞及びがたく候程よりは乱れたる所も候やうに候。(日本歌学大系第三卷)

と評しているのは同集を擔う歌人でありながら、それに全面的に賛成しえない態度がうかがえるものいえよう。

中世の歌の家の主流をなしていく俊成、定家の子孫は、定家の死後その子の為家が家学をつぎ、彼の死後は、その子の為氏、為教、為相がそれぞれ二条、京極、冷泉の家を立てて、三家に分立する。やはり、嫡流である二条家が家としても、また歌風の面でも中世を通じて主流として受け継がれて行くわけであるが、その歌風は定家の晩年の歌風を受けついで為氏の平明、温雅なものそれであった。そして、その為家の晩年の側室で、為相の母である阿仏は『夜の鶴』において新古今集の風体を評して

新古今昔の歌のやさしき姿にたちかへりて、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなむとする玉篋の上の霰など申すべきを、あまりたはれずごして、歌の様又悪しざまになりぬべしとて、新勅撰は撰者おもふ所ありて、まことある歌をえられけりなどぞ承り候し。(日本歌学大系、第三卷)

としており、夫為家の考文をそのまま示してくれているものであろう。

やがて、三家の対立は、当初冷泉為相が鎌倉に多くいて、京都では十分に一派を立て得なかったこともあって、おもに二条家と京極家の対立としてあらわれる。(ともに庶子である冷泉は京極と提携)たとえば、二条派側の何者かが、匿名で為兼を非難した『野守鏡』や、『玉葉集』の撰者をめぐる為世と為兼の論争『延慶両卿訴陳状』等は両家の対立をよくあらわしているものである。もはや歌の世界の主張の対立を越えて、大覚寺統、持明院統と両統の政權に結びついた主導権争いという面が強くなっている。

このような状況における嫡流である二条家の新古今集の評価を単的に示しているものに『正風体抄』がある。成立年時は未詳であるが、「二条家が為家の後、二条・京極・冷泉の三家に分れ、相

1) 樋口芳麻呂「統後撰目録序残欠とその意義」(「国語と国文学」昭和三十四年九月号) 四七ページ

争うに至った後の成立で二条為世あたりのしわざであろう」と久曾神昇氏は推定されており<sup>2)</sup>以後二条家において重んじられた秀歌選形式の歌論書である。そこに掲げられている歌は具体的に

- 千載集（第七代勅撰集）
  - 俊成（撰者）三六首
  - 定家（家督）八首
- 新勅撰集（第九代勅撰集）
  - 定家（撰者）一五首
  - 為家（家督）六首
- 統後撰集（第十代勅撰集）
  - 為家（撰者）十一首
  - 為氏（家督）六首

と計八三首を抄出しているが、第八代勅撰集、新古今集の俊成、定家の歌はそのままそっくり省かれている。このように二条家において新古今集は異端視され、評價されていなかったのである。

新古今集から後、二条家直系の五つの撰集（新勅撰集、統後撰集、統古今集、統拾遺集、新後撰集）を経て鎌倉末期の『玉葉集』とさらに三十六年の後、二条家の『統千載集』『統後拾遺集』をはさんで南北朝時代の『風雅集』が京極派の勅撰集である。いかにいえば玉葉、風雅をのぞく新古今集以降の勅撰集（十一代集）はすべて二条派と関連の深い歌集である。こういう状況で選ばれた両集は当然ながら二条派歌集に対抗する意識の強いものであった。よく二条派の古今集尊重に対して京極派の万葉集尊重を掲げる場合があるが、これはすでに新古今集において万葉への回帰が見られ、それからの踏襲といったほうがよいであろう。總じて、玉葉、風雅の両集において新古今の世界が発展的にとりあげられている、もしくは新古今的傾向の継承が見られるといえるようである。そして新古今以後しずんでいきつゝあった和歌の世界に新風をとりいれているものとしても評價されているものである。

ほぼこの時期と相前後して成立し、後世新古今評價に寄与しているものに定家假托書の問題がある。「おそらくこの三家の抗争の過程において、自家の權威を強めるために創作されたものであろう」<sup>3)</sup>といわれる『愚見抄』『三五記』『愚秘抄』『桐火桶』に代表されるいわゆる鶺鴒系偽書群の事である。これらの発生が以後、新古今集をおしあげるのに大きな役割を果たすのは、後の正徹への影響等を見ても明らかであろう。発生時期上、ここで述べておく。

以上、南北朝時代までかかる部分もあったが、凡そ鎌倉の末頃までは、特に主流であった二条家を中心に、新古今集は異端視乃至は敬遠視されていたということ。家風上も対立していた庶流である京極派の歌集においては間接的だとはいえ、新古今の世界の展開が見られるということ等がいえそうである。

2) 『和歌文学大辞典』

3) 久保田淳『新古今和歌集全評訳』第九卷 「新古今和歌集研究史序説」九ページ

## (2)

南北朝期は鎌倉中期に勃興した連歌が地下連歌師を中核に盛んになっていく時期である。そして、固定してしまい新しい精神や美をもちえなかった和歌は次第に連歌に圧倒されるに至り、新しい詩歌形態として連歌がだんだん重要な位置をしめていくのである。「中世の詩は新古今から玉葉、風雅へ、更に正徹への展開、一方新古今から純正連歌への展開にもっともすぐれた結実を見出す事ができる」<sup>4)</sup>という島津忠夫氏の説をはじめとしてこう考へは一般的になっており、このような連歌が盛んになって行く事は自ずと新古今への関心が流派を越えてだんだん高まって行くのと直結しているのである。

事実、二条派の代表的歌人でもある二条良基は、彼の歌論書『近來風体抄』で  
 新古今ほど面白き集はなし。初心の人にはわろし、心得たらん人は此の集をみんなこといかでかあ  
 しかるべき

とっており、また本歌取りの本歌の範囲についても、二条家断絶後も二条派の道統を継いでいく頼阿の説を発展させて

本歌には堀河院の百首の作者までをとる也。同じくは名人の歌をとるべし。勅撰は後拾遺までをとるべしと申しき。但、いまは金葉、詞花、千載、新古今などをとりたらしむはなにかかるしかるべき。此の分左相府へも申侍る事なり。連歌には新古今までをもとるなり。誣歌には近代の歌読の歌をも用ふる也。(日本歌学大系 第五卷)

としているなど、連歌作家として、冷泉家とも親交があり、二条家にとらわれないもっと自由な立場で、新古今集を取り入れていった事が想像される。

京極家は為兼失脚後廃れ、新しい傾向は冷泉家へと受け継がれて行く。二条派との対抗上、立場は玉葉、風雅的世界を発展させた、新古今の世界の展開上にあるものであった。この冷泉派で、為秀門の武將歌人であり、連歌もたしなんだ今川了俊が、多くのこした歌論、連歌論を通じて同集を賛美し、彼の弟子正徹になると、定家を通して新古今集は絶対的な存在となって行く。

この期における新古今集への積極的評価をおこなったものとして、傍流である耕雲明魏(花山院長親)を掲げたい。その著『耕雲口伝』において

又三代集のうちには後撰、拾遺の歌はいかにぞやうるさきことのまじりて聞ゆるなり千載集のさきほどに経信卿、基俊、俊頼いできて、此道中興せり、いはんや西行上人俊成卿、定家卿など和歌の大聖人なり。これによりて新古今の一集、文質合兼て、今古のいひふるさぬ心をよみ出でて、淳古の風一変するに似たれども、唯古ばかりをまなびて珍しき心をよみいでざるは、昔の人の口まねにてこそあらめ。歌の道はいかでか相統せん。

また

4) 「和歌史と中世」(「言語と文芸」四八号)二二ページ

詞は歌の文なり、かざりなり。後撰、拾遺より金葉、詞華のころほひまでは、歌をよむに、心を本とすといへども、詞をえらぶことなきによりて、歌の姿いやしきに似たり、君臣合体、時節到来するによりて、新古今の一集、ころの泉みなもとふかきのみならず。詞の花にほひ妙にして、人のめをおどろかし、人のみよをよるこばしめて、錦繡を織りみだし、金石を合奏するに似たり。（日本歌学大系 第五卷）

と述べ、礼賛している。

このように、南北朝においても、二条家における古今集尊重の基本姿勢は変わらないが、和歌になりかわって詩における主流の位置をかためていきつつあった連歌の方からおもに新古今集は取り入れられていったようである。その背景には、三句切れ等連歌の出発の問題、冷泉為相、為秀にまなんだ連歌師の活躍等があつたのである。歌道師範としての地位を確立して行った冷泉家を中心に新古今の地位が徐々に向上されつつあつた事は新古今享受の上で意義深い事であろう。

### (3)

室町時代になると了俊に師事した正徹からその弟子心敬へと冷泉派の定家至上への系統を通じての新古今尊重が特に注目されるが、總じて、二条を含めて新古今への共感が連歌師を中心に、句作りへの前提として享受、注釈等を通じ、高まり、重んじられていった時代である。中世における新古今評価の絶頂期とでもいえようか。しかし、後でふれるが、この期において古今集の流布に大きな役割をはたした『古今伝授』の權威に代表される古今の伝統はなお一般的であり、このような古今伝統をふまえた俊成等を通じての新古今評価の姿勢が、常縁、宗祇等二条派ではむしろ一般的であつたようである。

冷泉為尹、今川了俊に師事した正徹は『徹書記物語』の冒頭で

於歌道定家を難ぜむ輩は、冥加もあるべからず、罰をかうぶるべきなり。  
といひ、また『清巖茶話』で

ねざめなどに定家の歌を思ひ出しぬれば、物ぐるひになる心地し侍る也  
とあり、同じく同書で

定家歌は殊に恋の歌はしみ入りて、何ともかとも覚えぬが多きなり。惣じて定家には有家、雅経も、通具、通光も及ぶべきことにあらず。家隆は歌は殊勝によませられて侍る。

（日本歌学大系 第五卷）

として、『新古今集』の中でも特に、定家至上、その中でも恋の歌をほめたたえている。さらに彼は作風においても定家的なものの延長上にあるようにしているようで、定家を通しての新古今賛美を代表する人物といえよう。

彼の弟子心敬になると新古今集に対してさらに深い理解を示し、一步おしすすめ『さゝめごと』等連歌論を通じて、和歌と連歌とは同一のものだとし、その彼が範とした和歌は新古今歌人やそ



の影響を強くうけた正徹の歌とまでなるのである。『さゝめごと』には新古今について

又歌の道も、中つ比よりは品くたり侍るよしうけたまはる。さもなり行きぬることやらん。古人の申し侍るは、水無瀬の宮の御代にぞ、古にもをさをさこえたる歌の聖、数を盡くしていまそかりける。さまざまの姿をおこし、道の奥をきはめ、世にときめき給ひしこと、ひとへに此の御時と見え侍り。（『連歌論集 俳論集』日本古典文学大系）

といい、新古今時代の歌人や秀句例を特に多く掲げている。また「古今自讃歌少々」として自讃歌二十一首をあげているが、その中の二首をのぞく十九首は今流布している「自讃歌」からの抄出であり、新古今における自讃歌の位置を単的に示しているものといえよう。そのほかにも『所々問答』『岩橋』『老のくりごと』等を通して新古今集の歌を極讃している。

二条派の正説を継承した歌人として宗祇に古今集を講じ『古今集両度聞書』を伝授した東常縁は古今伝授の創始者と目され、古今集流布に大きな役割をはたしているが、師事交友の経過から流派を越えた視点を持ち彼の著書『東野州聞書』等を見ると新古今、定家をも正しく評価しており、また新古今集のまとまった代表的な初期の注釈書『新古今和歌集聞書』を残している。

宗祇は心敬、宗徹、常縁等から師事を受け、連歌を大成させて行くわけであるが、周知のように古典研究にも大きな業績をのこしている事はいうまでもない。彼においても歌道における中心は、やはり『古今集両度聞書』を記す等古今伝授權威にあつたようだが、連歌論『吾妻問答』、注釈書『自讃歌注』『十代抜書』を通じて新古今集も評価し、認めるべき所を認めていく姿勢である。それは主として古今継承による俊成への傾倒を中心とした新古今の受容であつたようである。

以後、兼載、宗長、三条西家、幽齋へと、歌の世界の大きな枠として古今伝授が続きながらも、それにしぼられる事なく連歌師を中心に新古今は評価され、享受されていくのである。後章でのべるが注釈が多くなることもその一つのあらわれであろう。

歌の家においては、時代が下るにつれ、二条派では二条傍流の飛鳥井家が活躍し、また冷泉家も上冷泉、下冷泉と分かれる。勅撰集も選ばなくなり、両派の歌風主張、対立も希薄になり、作家も凡庸になっていった。従って新古今に対する関心もだんだん流派を越えたものとなっていくのは、和歌史とも期をいつにするものであろう。

以上、新古今集が鎌倉初期成立以後中世において、どのように関心をもたれ、評価されていったか、その変遷の有り様を三期に分けて検討してきたわけである。三期に分ける事は、特に南北朝から室町にかけて展開上分けにくい面もあるが、便宜上そうした。

總じて、鎌倉期は、主流である二条家の考えが強く、王業、風雅等新風は異端視された事もあって、新古今集は敬遠されがちであつた。それが、南北朝期連歌が盛んになっていくのと時を同じうして、積極的に評価されはじめ、室町期になると、正徹、心敬を中心に新古今至上的な考えまで生まれ、連歌師を中心に関心が深まっていった。心敬の定家尊重、宗祇の俊成尊重といったような指向する歌の世界、歌人の相異は見られるが。

5) 木藤才蔵『連歌論集一』解説（三弥井書店、昭和四十七年刊）

このような新古今集への関心は、連歌におけることばよせの傾向がその推移を単的にあらわしている。すなわち、鎌倉末期に成立した寄合集『連証集』では引用歌百六十五首のうち、『古今集』の歌三九首、『新古今集』の歌十九首と古今集の歌がはるかに多かったのが、室町初期成立の『連珠合璧集』になると『古今集』の歌三七首、『新古今集』の歌四七首と『新古今集』の歌が『古今集』より十首も多くなる。また、それは典拠とする作品集の中でも最も多いものであった<sup>9)</sup>

## 2. 中世における新古今集の古注釈

中世後期に流行する勅撰集の古注釈は、ほとんど、歌人や連歌師が、自分の歌や連歌を作る為の参考に、古典を勉強の対象とした事からはじまったようである。従って、和歌を歴史的にたどってそれぞれ名歌を選びそれに注を加えて行く傾向が強い。その為に全注ではなく抄注の場合が多く、また一つの集のみを対象としたものより、他の集と併せ行いものが多い。

こういう状況の中で、特に新古今集の注釈は新古今への関心が高くなり、共感、讃美の傾向へと変わって行く南北朝以降室町期を中心に、連歌師の詩の世界への共鳴を得て、代表的な連歌師により加えられた注釈が目立ち注目される。

最近、すでにしられているもの以外にも片山享氏等によって新しい注の紹介が続いており、既存のものについての研究も、『宗長秘歌抄』を「連歌師の古典和歌享受の方法」という観点でとらえた岸田依子氏の論考<sup>1)</sup>等、享受史への関心と相俟って活発におこなわれている。

ここでは、中世に成立したといわれる新古今関係の古注釈にどのようなものがあるのか、先学の研究も参考にせず整理し、その後必要に応じて、注の傾向や内容等についてもふれて行きたい。なお、自讃歌の注は、新古今集以外の歌も多少含むが(170首中18首)、それも新古今歌人による新古今時代の歌であり、実質的には新古今の選釈と見なす事ができるので、対象としてとりあげた。もっとも黒川昌享、赤瀬信吾、石川常彦氏の諸論や拙考等ですでに知られているように自讃歌注だけでも数十種に達するので、自讃歌注にかぎって、恣意により論を進めて行く上で必要な、代表的なものを数種選んで掲げる事にした。

内容は注作者、成立時期、歌の教に留め、注羅列の方法は、注作者1人に2種類の注を有する場合もあるので、注作者別にあげ、注作者、成立年時両方とも未詳の分は所蔵館名等に表示し最後に一括してとりあげた。

頓阿

○『自讃歌抄』 元徳二年(1330)成立、自讃歌の注

1) 「『宗長秘歌抄』の注釈態度—連歌師の古典和歌享受の方法—」(『連歌俳諧研究』第六十三号)

10 王 淑 英

常縁

- 『新古今和歌集聞書』 文明二年以前(1470)成立か。『新古今集』200首の注
- 『月花集拾遺』 晩年の常縁(文明十六年没)の講説を明応二年(1493)弟子道暎成文化自讃歌の注。

作者未詳広島大学蔵本

- 『自讃歌注』 文明四年(1472)以前成立か。自讃歌の注。

宗 祇

- 『自讃歌注』 文明16年(1484)成立、自讃歌の注
- 『十代抜書』 成立年時不明、後撰より統古今に至る十代勅撰集から390余首抄出、新古今集からの抄出96首

兼 載

- 『自讃歌聞書』 延徳4年(1492)成立か。自讃歌の注
- 『新古今抜書抄』 成立年時不明、永正7年(1510)没、新古今集中112首抄出

孝 範

- 『自讃歌注釈』 明応2年(1493)以前成立、自讃歌の注

肖 柏

- 『九代抄』 文亀3年(1503)歌のみ抄出、加注者及び加注年時未詳、後撰から統後撰まで勅撰九代から1500首抄出、新古今集からの抄出531首

宗 長

- 『宗長秘歌抄』 成立年時不明、享祿5年(1532)没、万葉から新古今まで143首抄出、そのうち新古今からの抄出89首

作者未詳

- 『天文鈔本新古今倭詞集春夏』 天文19年(1550)以前成立。新古今春上下夏三巻の全注  
清原宣賢

- 『新古今注』 宣賢書写か、成立年時不明、新古今748首抄出。

幽 齊 増 補

- 『新古今和歌集聞書』 慶長2年(1577)成立、常縁原注幽齊増補416首加える。

吉田幸一氏、高松宮家蔵

- 『新古今和歌集註』 新古今から九七八首抄出

坂井寛乘旧蔵後藤重郎蔵

- 『新古今集之内哥少々』 新古今から二四九首抄出

九州大学支子文庫蔵本

- 『自讃歌』 自讃歌の注、宗祇注に影響をあたえている事からそれ以前成立

以上、新古今関係の注をならべて見たわけであるが、この他にも『百人一首』『詠歌大概』の注、

宗碩の『五百箇条』ほか歌論、連歌論の中にも新古今の歌に注を加えているものも多く見出せる。

『天文鈔本新古今倭歌集春夏』は小島吉雄氏の「新古今和歌集注釈書の話」<sup>2)</sup>ですでに『新古今注』として紹介されたものであるが、最近片山氏によってさらに詳しい考証が行なわれ、注作者は兼載と関連のある連歌師とされ、そして、この注の大事な意義として春、夏の三巻にとどまっているが、「新古今集全巻注釈を意図した事は明らか」であるという事を前提にして「室町期の新古今注釈書が全て選釈本である中において、最初の全巻注釈書が企図された事になるわけで現行最初の全巻注『新古今増抄』（寛文三年刊）の百年以上前に意図された新古今全巻注釈本として研究史上注目すべきものといえよう」<sup>3)</sup>と最初の全巻注を企図している事をあげているように、これのみが選釈でなく全釈である。

そしてこの全注一本以外の中世の新古今古注は大方二流に分ける事ができるのではないかと思われる。すなわち、(1)「自讃歌」という新古今集のダイジェスト版として予めあるものに諸人がいろいろと注を加えたものと、(2)新古今集の歌を注作者自身が選出して、それに注を加えたものにてある。後者はまた、常縁『新古今和歌集聞書』、兼載『新古今抜書抄』のように①新古今集だけの選釈と、宗祇の『十代抜書』や宗長の『宗長秘歌抄』のように、②いくつかの勅撰集からの抄出との二種類に分かれる。

自讃歌はその序文において、後鳥羽院の下命により新古今集の代表歌人十六人が、おのおの十首ずつを選んで献上し、これに院自身の十首を加えたものとしているが、自ら選出する事は作者の年齢から不可能な面もあり、現在では一部に自選歌を含む可能性があるにしても、全体としては他選とする見方が有力であり、鎌倉初中期の選と見なされている。所収歌人及び所収歌が当時を代表するものであるため、新古今集のダイジェスト版として、和歌の入門書としてもはやされていたようで、新古今の一般の注釈書よりも数の多い注釈書がのこされている。成立もはやく、南北朝時代頃阿による注があり、これは室町時代以前の新古今関係注の唯一のものである。この注の出現によって、従来、新古今集の注釈の嚆矢とされていた東常縁の『新古今和歌集聞書』成立の文明二年から元徳二年まで、新古今歌の注釈のはじまりが約百四十年、時期的に溯ることとなる。

新古今集の一般の注は前出、常縁の『新古今和歌集聞書』がまとまった代表的なもので、当時においてもそう受けとられていたようあり、この注に室町末期の細川幽齋が『天文鈔本新古今和歌集春夏』、三春秋田家本『新古今和歌集抄出聞書』、新城・牧野文庫本『新古今集聞書』、吉田幸一・高松宮家蔵『新古今和歌集註』等室町期諸注を取込み『増補本新古今和歌集』をつくり、中世の新古今注の一応の整理を行っている。<sup>4)</sup>

またいくつかの勅撰集より抄出された注の場合、宗祇の『十代抜書』が三百九十首中九六首を、肖柏の『九代抄』が千五百首中五三一首を、宗長の『宗長秘歌抄』が一四三首中八九首を新古今集

2) 『新古今和歌集の研究』一八五ページ(星野書店、昭和十九年刊)

3) 「『天文鈔本新古今倭歌集春夏』について」四ページ(「甲南国文」第三十号)

4) 片山享「『新古今和歌集註』について」(『和歌文学研究』四八巻、昭五九・三)

からとっており、和歌を歴史的にたどるという立場でいくつかの集から選んでいるが、その中で新古今集のしめる比重は特に大きい。彼ら連歌師にとって新古今集がどのような意味を有するものであったか、評価、享受の一端をよくあらわしているものであろう。

自讃歌注はきまった歌人十七人の歌十首に注を加えているわけであるが、一般の新古今注の場合はどうであろうか。勅撰集からの抄出自体、注作者の享受の一法をうかがえるものであり、代表的な常縁、宗祇、兼載、宗長の注釈を選出傾向を知るために所収歌の作者について調べて見た。

常縁の『新古今和歌集聞書』は二百首の歌に六五人の多岐にわたっており、時代も当代にかぎっておらず、万葉から前代の人まで含んでいる。ただ入選歌の多い歌人をあげて見ると、良経二二、西行十五、定家十三、家隆十二、慈円十、寂蓮九、俊成、式子内親王、後鳥羽院八、通光六とみんな当代歌人であり、前代歌人は能因の四首というのがあるだけで、広くとってはいるが、当代歌人重視の傾向が目立っている。

宗祇の『十代拔書』は家持をはじめとして五八人の歌九六首をとっており、俊成、寂蓮五首、式子内親王、良経、経信、良忠、能因、紫式部、読み人しらず三首、他は一、二首ずつで当代の歌人詠は三四首に留まつている。わずか、俊成、寂蓮の歌を多くとり、定家の歌を少く取るなど、指向する歌人の傾向が見られるだけで、どのような選歌基準で選んだか定かでない。

兼載の『新古今拔書抄』は一一二首、三七人。やはり広い時代にわたっているが、西行十、良経、定家、家隆九首、後鳥羽院、慈円八首、寂蓮七首、俊成六首、俊成卿女四首、通光四首、秀能、具親三首と多い歌人は当代歌人である。

宗長の『宗長秘歌抄』は全体一四三首中新古今歌八九首、作者はやはり六四人の多岐にわたっており、上位歌人は良経十三首、定家十二首、俊成、家隆八首、慈円七首、西行、式子内親王四首、人丸、伊勢、元輔、讃岐三首と当代歌人の歌が多いが、前代歌人の歌も結構取っており、何んらかの分類意識とは無縁である。

以上、当代を代表する歌人、連歌師の注における選出作者をしらべて見たが、総じて、新古今時代の歌人を重んずる傾向はあるけれど、それにとらわれず広い範囲から、はば広く取るという姿勢の一端がうかがえるものであった。

つまり新古今集の二流の注のうち、自讃歌注は、当代歌人の代表歌という限定の中で、注の世界を深化させ、一般の注は自讃歌以外のものに、歌人も当代以前の歌人に範囲を広げるという事に大きな意義があるといえよう。

そういう中で新古今一般の注と自讃歌注の、共通する歌の数をしらべて見ると、自讃歌注と『新古今和歌集聞書』、『新古今拔書抄』が五十首、『十代拔書』、『宗長秘歌抄』が各々一首と、注の比較対象としては、聞書、抜書抄が目される。この比較はしばしば行なわれ享受の仕方を考える際よい資料となるわけであるが今、兼載の抜書抄と自讃歌を一首比べて見ると、

雲はみなはらひはてたる秋かぜを

松にのこして月を見るかは

(秋歌上 四一八番 良経)

(抜)心まてに月をみたる躰也。晴天にて雲のすこしも無き月也。然共、雲といふ物は、さためのなき物にて又いてくる事もや、と心もとなくおもふによりて、にのこしてといへり。松に残たる風なれば、何時も吹はらふへしと云心也。

(自)是は青天に月をみたる也。雲は定なき物なればしらぬ所に松に風を残して雲おこる共心安といへる心也。思いのまゝに月をみるよし也。

と趣旨はまったく近似しているが、抜書抄は繰り返し懇切丁寧におしえているという姿勢をとっているのに対し、自讃歌注は整理されているという感が強い。

注の内容についてはまた章をあらためて考察していかなければならぬかと思ひ、ここでは中世の古注の種類と外型的な特徴にのみふれた。くりかえしになるが、新古今集一般の注は時代や歌の範囲す当代以外のものに広げ、自讃歌は同じ歌に多種の注を加える事によって歌の世界を深化させていくことに大きな意義があるといえよう。

### 3. 自讃歌注への関心とその意義

新古今集の現代研究史において、全体的に古注釈の研究はおくれている感があるが、特に自讃歌は前章でも記したように、新古今集そのもの以外の他集の歌を含む事や自讃歌序文にからむ成立事情の問題などから、その価値が十分に評価されていなかったきらいがある。

その中で自讃歌注研究の嚆矢となったものは、中世の諸注を紹介、考察した黒川昌淳氏の『中世の自讃歌註十種管見』（昭和四二年）であった。その後、しばらくたってから、昭和五三年赤瀬信吾氏が「佐賀鍋島文庫蔵自讃歌註をめぐって」を発表したのを皮切りに、翌年石川常彦氏が「自讃歌宗祇注の周辺」と、自讃歌の編纂者を後鳥羽院と推定なされた自讃歌そのものに関する論考「自讃歌考」を出し、だんだん活潑になってきた。その後研究と並行して資料の影印本や翻刻本が続出し単行本だけでも、京都大学蔵の頓阿、宗祇注を影印にし、その解説で自讃歌注の整理を行なった赤瀬信吾氏の『自讃歌注』、常縁注を影印と翻刻で出し、頭注と解説を付した石川常彦氏の『月花集拾遺温泉寺本自讃歌注』九州大学支子文庫蔵の三つの注の影印と福井迪子氏解説の、在九州国文資料影印叢書、東海大学蔵本と太田武夫氏蔵本を影印にし、解説を加えた拙編『自讃歌注』と、書誌的な研究も進み、研究に拍車がかかっている。享受史への関心が高まるにつれ、新古今集のまとまった資料として見なおされてきている感が強い。

この章ではまず、自讃歌に選ばれている歌人、歌について考察し、自讃歌注の意義を宗祇注をもって考えて見たい。

自讃歌に選択されている歌人の新古今入集状況とその後の歌人評価の変化を知るために十三代集を中心に勅撰集の入集状況を調べて見ると、別表のようになる。定家、俊成が最も多いのは、中世の歌の家の祖であるので、当然であろうし、西行は新古今集では最も多く入集されるが、その後、不振で玉葉で再び多く入集され注目される。定家、俊成、良経、家隆、慈円、西行、後鳥羽院、式子

自讃歌歌人の勅撰集入集状況 ほめたたえている。

歌人名 勅撰集名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	西行	愁円	良経	俊成	式子内	定家	家隆	寂蓮	俊成女	後鳥羽	俊成女	雅経	有家	通具	秀能	宮内卿	通光
八 新古今	94	92	79	72	49	46	43	35	33	29	22	19	17	17	15	14	7
七 千載	17	8	7	*詞花1 36	9	8	5	7				1					
九 新勅撰	14	28	36	34	14	15	43	8		8	20	4	3	9	2	4	3
十 続後撰	11	18	27	26	15	43	18	8	25	10	8	3	1	5		4	3
十一 続古今	11	11	28	28	9	56	41	5	49	7	14	7	4	1	3	2	3
十二 続拾遺	9	12	18	22	5	28	17	6	19	9	13	3	1	9		4	2
十三 新後撰	11	9	14	18	5	32	18	10	10	7	7	5	1	5	1	4	
十四 玉葉	49	22	14	56	15	68	15	7	17	7	6	7	1	3	9	1	
十五 続千載	4	5	11	19	2	26	10	3	14	6	6	1	1	3		3	
十六 続後拾遺	2	6	10	15	5	20	9	3	9	5	5	3	1	3	2	1	
十七 風雅	12	18	17	29	13	35	14	2	24	5	1	2		8	1	1	
十八 新千載	4	7	9	15	3	19	8	5	10	5	6	2	1	3	1	1	
十九 新拾遺	8	6	7	12	3	23	15	5	12	2	5	4	2	3	3	4	
二十 新後拾遺	3	2	8	9	4	18	11	3	6	5	3	3	2	2	3	1	
二十一 新続古今	3	11	25	21	3	18	11	6	18	4	16	4	3	8	3	6	3
	252	255	310	413	154	455	278	113	246	109	132	68	38	79	43	50	21

\*山岸徳平『八代集全註』3「勅撰作者部類」より

内親王、雅経、寂蓮、俊成卿女、秀能、有家、通光はみんな合せて五十首以上入集されており、十三代集にもれる事もなく穩当な入選といえる。通具、宮内卿、具親は三八、四三、二一と少く、特に具親は新古今にも十首以下の入集であり、選者個人の晶眞による面も歌数の少い人を中心にかがえる。自讃歌所収歌人以外に入集の多い人は俊惠八四、実定七八、二条院讚岐七二、兼実五九、長明二五等であるが歌数の多い俊惠、実定は一一九一年没して新古今時代以前の歌人といえるものであり、総体的に無難な入選といえるものであろう。なお、『桐火桶』にも宮内卿、通光がもれており、十三代集の評価と一致しているといえよう。所収歌は比較がむずかしいが当時評價されていた歌はだいたい入っているようである。

自讃歌は積極的な面として、①取りあげている歌の数が分量的にまとまりがあり、客観的にも多い中ですぐれた歌を選んでいる。②当時中世の代表的作家をとりあつかっている。具親等所収歌の少い人が入っているが、逆に代表歌人の中にもれている人はいないこと等があげられよう。

つまり、自讃歌は純粹に新古今時代の注であり、中世の有力な作家が参加して、数もまとまっており、質もすぐれている。それで自ずと新古今集当代の大事な本質の傾向をよくとらえているため、ダイジェストとして連歌師を中心に盛んにもてはやされたのではなからうか。それが『万葉集』『源氏物語』のような大作の中で、『百人一首』とともに百七十の小秀歌選でありながら執拗にとりくまれ多くの注が作られそれらがさらに、お互いに影響しあいながら盛んに注がつくられていった事は歴然としている。

「あはれ」は宗祇文学における大事な基調をなすものとして彼の人間主義的立場がよくあらわれているものである。それは自讃歌の宗祇注にもっとも單的にあらわれており、拙考においてもあつかった事がある。<sup>1)</sup>

霜寒る山田のくろのむらすゝき

かる人なしにのこる比かな

(冬歌 六一八番 慈圓)

たゞいかにもさびしくあはれなるおもかけ侍るなり。かやうのうたにこゝろをつけて見侍るべきにや。さびしきといひあはれなるをあはれといふも侍れども、かくのごとくなにもいはでそのおもかけ侍るをおもひ分べきにこそ。

としていることと荒涼としいる自然景を單なる景としてとらえているのでなく「あはれ」の立場でとらえている。序でもふれたように定家の歌を新風とする新古今集の現代の受け取り方は絵画的、構成的、象徴的かど美学的側面からの外型的なものが主であった。それに對け宗祇の理解の仕方は心情の面からの人間主義的立場であり、従来を受け取り方を越えるものがあるとおもわれる。宗祇自讃歌注は諸注の中でも特に、当時の文学理念である幽玄有心の立場で歌すとらえているのではなく、人間と人間のつながりから生まれる「哀れ」をに、戦乱の時代の文学としての重點がかけられている事、それはまさに時代に危機感のあふれる現代においても切実なものであり、人間性尊重の「あはれ」の側面に今日的意義があるのではなからうか

## 序び

新古今集は、成立後しばらく異端視されていたが、中世後半連歌の世界にその詩的同感を得、連歌師を重心に重んじられた。それにもなって注釈もさかんにおこなわれ当時における新古今集の一端をうかがう中心資料となっている。その中で自讃歌注は新古今集の大事な傾向を収斂しているダイジェスト版としてもてはやされ、注釈の中でも中心となるものであった。また、注の現代的な意義の大事な一端は宗祇注を通して「あわれ」という観点から新古今集をうけとる視点にもとめる事ができよう。序でふれたような現代までいたる新古今集の歌風に対する外面的、美的理解の仕方に対し内面的深化を加えている点に注目すべきであり、それは自讃歌注を通じての新古今集研究の意義の現在の私における大きな一つの柱となるものであろう。

1) 『「あわれ」と『面白』と』(「湘南文学」第二十号)



## 参 考 文 献

- 風巻景次郎『新古今時代』（昭和十一年人文書院、再版『風巻景次郎全集』6）『中世和歌の世界』  
（風巻景次郎全集7）
- 小島吉雄『新古今和歌集の研究』（昭和十九年 犀野書店）
- 久松潜一『中世和歌史論』（昭和三四年 塙書房）
- 国語国文学大成7『古今集新古今集』（昭三五年 三省堂）
- 愛知県立女子大学国文学研究室編『新古今諸注一覧』（昭和三六年 愛知県立女子大学国文学会）
- 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』（昭和三六年 風間書房）
- 藤平春男『新古今歌風の形成』（昭和四四年 明治書院）
- 田中裕『中世文学論研究』（昭和四四年 塙書房）
- 福田秀一『中世和歌史の研究』（昭和四七年 角川書店）
- 石田吉貞『新古今世界と中世文学』上・下（昭和四七年 北沢図書出版）
- 後藤重郎『和歌研究史』（和歌文学講座第十二巻、昭和四五年 桜楓社）
- 安田章生『藤原定家研究』（昭和五十年 至文堂）
- 久保田淳『新古今和歌集全評釈』第九巻（昭和五二年 講談社）
- 山崎敏夫編『中世和歌とその周辺』（昭和五五年 笠間書院）
- 石川常彦『月花集拾遺』（昭和五六年 和泉書院）
- 赤瀬信吾『自讃歌注』（昭和五五年 京都大学国文学研究室）
- 『増補新版日本文学史 中世』（昭和五二年 至文堂）
- 『日本文学全史 中世』（昭和五三年 学燈社）
- 岩波講座『日本文学史 中世』（岩波書店）
- 小西甚一『日本文芸史』（昭和六十年 講談社）
- 『勅撰集をどう見るか』（「国文学解釈と鑑賞」昭和四十三年三月号）
- 『南北朝一動乱期の文学』（「国文学解釈と鑑賞」昭和四十四年三月号）
- 『古今集新古今集必携』（別冊国文学・NO.9 昭和五六年 学燈社）